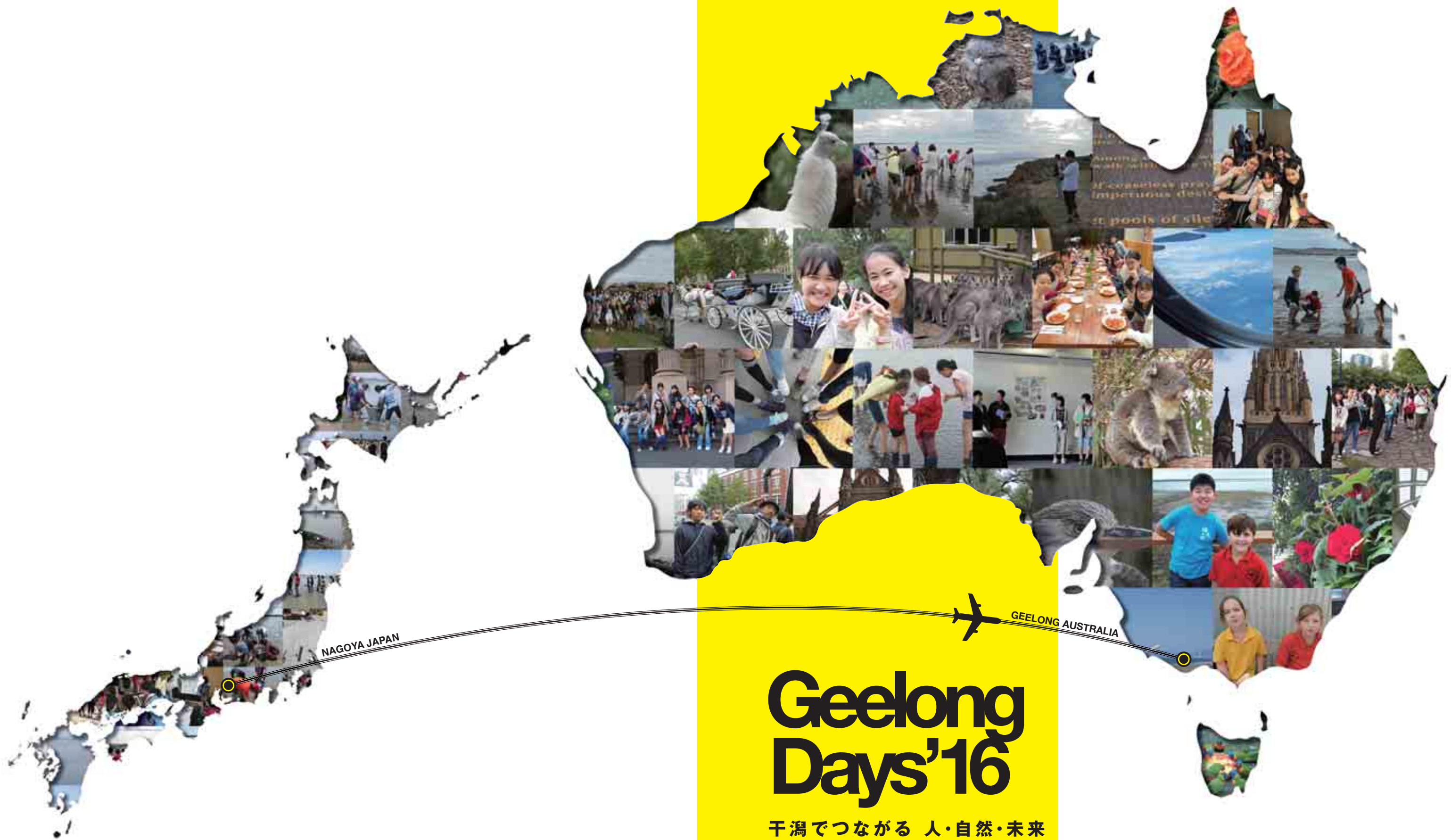




GEELONG DAYS'16 干潟でつながる人・自然・未来

ジロング・デイズ ■発行 名古屋市環境局 〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL.052-972-2662 FAX.052-972-4134
■発行年月 平成28年9月

◎環境に配慮し、古紙パルプを含む再生紙とベジタブルオイルインクを使用しています。

Geelong Days'16

干潟でつながる 人・自然・未来

ジロングデイズ'16 報告書

平成27年度 オーストラリア・ジロング市との
湿地提携に基づく人的交流事業

はじめて

平成28年3月、名古屋の中学生18人は、名古屋市と湿地提携を結んでいるオーストラリア・ジロング市を訪問しました。

野生生物を保護する施設を視察したり、現地の人々と交流をしたり…もちろん干潟にも入りました。見るもの、触れるものすべてが新しい異国の地で、中学生たちはさまざまな体験をし、環境マインドを養いました。

この報告書は、彼らが見聞きしたことを、彼らの言葉でつづったものです。これを読んだひとりでも多くの方と、思いが共有できることを願っています。



渡り鳥が取り持つ名古屋とジロングの縁

～オーストラリア・ジロング市との湿地提携に基づく人的交流事業について～

名古屋市にある藤前干潟は、北半球と南半球を行き来する渡り鳥が数多く飛来する大切な中継地。豊富なエサがあるこの場所で羽を休めた鳥たちは、オーストラリアやシベリアなどへ向けて旅立っていきます。

渡り鳥が取り持つ縁をきっかけに、名古屋市とジロング市は平成19年5月22日に湿地提携を結びました。それ以来、両市は協力して湿地の保全や活用に取り組んでいます。



名古屋市では自ら環境保全活動に取り組むことができる人材を育成することを目的に、2年に1度、市内在住・在学の中学生をジロング市へ派遣しています。今回の派遣が5回目。これまでに86人の中学生が海を渡り交流を深めました。

ジロングってこんな町

豊かな自然に恵まれた港湾都市

ジロング市はオーストラリアの南東部にあるビクトリア州第2の町。人口はおよそ23万人。気候は温暖で、過去にはプロ野球の千葉ロッテマリーンズが春季キャンプを行ったことがあるそうです。海に面し、豊かな自然に恵まれた風光明媚な町で、別荘地や観光スポットが数多く整備されています。また、自動車製造や石油精製といった重工業も盛んです。



メルボルンってこんな町

初日に立ち寄ったメルボルンは、およそ430万人の人々が暮らすビクトリア州の州都です。ジロングとは陸路で1時間ほどの距離にあります。市内の至る所に公園があることから「ガーデン・シティ」とも呼ばれ、世界一住みやすい街に選ばれたこともあるそうです。



見て、触れて、体験した 学びと気づきの6日間

名古屋からオーストラリアまで、フライト時間だけでも15時間近くかかる長旅となりました。18人の中学生たちは疲れを見せることなく、施設の見学や動物との触れ合い、現地の人たちとの交流など、さまざまな行事に積極的に取り組みました。



旅のカレンダー



3/26 [土] **1日目**
出 発

中部国際空港▶
シンガポール・チャンギ国際空港▶
メルボルンへ



3/27 [日] **2日目**
メルボルン国際空港着、
メルボルン市内および近郊

- ☐ セント・パトリック大聖堂
- ☐ フィッツロイ公園
- ☐ キャプテン・クックの家
- ☐ コンバートリー(温室)
- ☐ 王立博覧会ビルとカールトン公園
- ☐ メルボルン博物館
- ☐ リトルイタリー
- ☐ クイーンズ・ビクトリア・マーケット
- ☐ フィリップ島自然公園

3/28 [月] **3日目**
メルボルン市内、
ジロング市へ

- ☐ ترام体験乗車
- ☐ メルボルン駅
- ☐ ビクトリア州立図書館
- ☐ チャイナタウン
- ジロング市へ向け、バス移動
- ☐ セレンディップ保護区



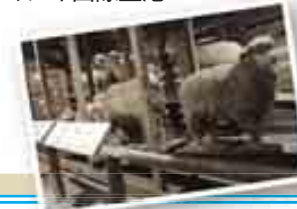
3/29 [火] **4日目**
小学校の児童やその家族、
教員との交流

- ☐ 海洋発見センター
- ☐ スワンベイ干潟
- ☐ ジラリング・コアラ野生動物保護区



3/30 [水] **5日目**
ジロング市表敬訪問

- ☐ ジロング市役所
- ☐ ジロング・ギャラリー
- ☐ ウール博物館
- メルボルン国際空港▶
チャンギ国際空港



3/31 [木] **6日目**
帰 国

チャンギ国際空港▶
中部国際空港



オーストラリアでしかできない体験がある

触れ合うことで学んだ、自然の大切さ ～セレンディップ保護区、ジラリング・コアラ野生動物保護区～



私たちが行った2つの保護区には、コアラやカンガルー、とてもカラフルな鳥たちなどがいました。ここではけがをした動物を保護し、元気になったら野生に返すという取り組みが行われています。

セレンディップ保護区ではおりがないことに驚きました。ジラリング・コアラ野生動物保護区はおりがあるものの動物たちとの距離が近く、コアラと触れ合うことができました。

けがをしてしまった動物たちが、早く元気になって野生に戻ってほしいと思うようになりました。



おりのない動物保護区で動物たちと触れ合ったり、野生のペンギンを見たり、ここでしかできない様々な体験をしました。

動物園では見られない、ペンギンの姿 ～フィリップ島自然公園～

フィリップ島自然公園のペンギンパレードでは、世界最小のリトルペンギンを夜に観察することができます。そこでは、ペンギンが小さな体で巣に向かって懸命に歩く姿が見られました。

しかし、1日に約40羽ものペンギンがキツネに食べられてしまっているそうです。野生動物は毎日命がけなのだあらためて思い知らされました。

施設では、カメラ撮影を禁止したり、照明を使いすぎたりしないといったペンギンに対する配慮がなされているそうです。とてもよい取り組みだと思いました。



まとめ

セレンディップ保護区やジラリング・コアラ野生動物保護区、フィリップ島自然公園などを訪れ、生きもの中心の環境づくりを行うことの大切さを学びました。人間と動物が共存できる世の中をつくるためには、人間の配慮が欠かせないものだと思います。

このような施設を日本にも増やし、多くの人に環境について関心を持ってもらうことが大切だと強く感じています。

小学生が愛するスワンベイ干潟



ごみがひとつも落ちていない、きれいな干潟 ～スワンベイ干潟～

ジロング市には100以上の湿地があります。私たちが行ったスワンベイ干潟は、そのうちのひとつ。名古屋の藤前干潟で休んだ渡り鳥がやってくることもあるそうです。

スワンベイ干潟には南極から風が吹いてきて、名古屋より寒いと感じました。ごみがひとつも落ちてなく、藤前干潟にあった漂着物すらありません。また、藤前干潟のような磯の香りもしませんでした。

スワンベイ干潟では、地元の小学生たちと一緒に生きもの探しをしました。干潟にとっても慣れ親しんでいて、たくさんのことを知っていました。現地の子どもたちのように、名古屋の子どもたちにも自分たちの街にある藤前干潟のことを知り、藤前干潟を好きになってほしいと思いました。



現地の小学生とともに、スワンベイ干潟と海洋発見センターを訪ねました。
小学生の環境に対する意識の高さに驚きました。

小学生から学んだ、生きものへの思いやり ～海洋発見センター～



海洋発見センターは、スワンベイ干潟にすむ生きものたちを展示していました。私たちは、現地の小学生とペアを組み、館内を一緒に見て回りました。高学年だけではなく、1年生の小さな子でも、生きもののことを詳しく知っていることにびっくりさせられました。

海洋発見センターは、自然にとけ込んでいるような面白い外観をしています。生きた海の生きものが数多く展示されていて、水族館みたいでした。



まとめ

海洋発見センターには、素手で海の生きものを触ることができる水槽がありますが、現地の小学生は触る前に必ず手を洗っていました。これは生きものに菌が移らないようにするための配慮です。私たちより年下の子たちが、生きものに詳しいだけでなく、思いやりの心もしっかり持っていることに、感心させられました。

オーストラリアの文化と環境

街と自然が共存するメルボルン



メルボルン市は自然・人間・アートが調和した街。市内にはゴミ箱が10m間隔で置かれていて、ゴミがほとんど落ちていないことに驚きました。また、名古屋の何倍も街路樹があり、都市と自然とが上手に共存しているなと感じました。

オーストラリアに野生の生きものが多いのは、街に自然が多く、人間が意識を高く持って環境を整備していることが理由だと考えました。名古屋でも、生きものが住みやすい環境をつくっていききたいです。



Melbourne

比べてみました! 2つの文化



Nagoya

実際に行ってみて感じた日本とオーストラリアの違いを紹介します。

共通点

- 環境のことを真剣に考え、干渉を守ってこうとする人がいました
- 自動車は右ハンドルの左側通行で日本と似ていると思いました



相違点

- 日本よりも多くの国の人がいて、多文化社会を築いていました
- 観光用の路面電車の運賃が無料で驚きました
- 地震がなく、歴史的な建造物が多く残っていました
- 信号が変わるのがとても早かったです



日本との文化の違いや日本にはない環境の取組みなど、オーストラリアを訪問して気付いたことをレポートします。

街中で見かけた2つの旗



メルボルン市内には、オーストラリアと先住民であるアボリジニの2つの旗が並んで立てられている場所がところどころにありました。これは昔、アボリジニの方々が迫害されたことから、その歴史を忘れないようにという意味があるそうです。

様々な人種の方々が歴史に学び、共に尊重しあって生活していること知り、私たちも見習うべきことがあると考えさせられました。

アボリジニクイズ

Q.アボリジニの旗の3つの色の意味はそれぞれ何でしょう?(答えは下に)



ジロング市役所を表敬訪問

表敬訪問では、とても緊張しましたがジロング市役所の方々に向けて英語でスピーチをしました。その後、童謡「ふるさと」の合唱を披露したり、折り紙やけん玉と一緒に楽しんだり、ジロングの方々に日本の文化を伝えました。私たちよりけん玉が上手な方がいてびっくり! 遠く離れた外国でも日本の文化が知られていることにも驚きました。

今回の経験を通して、日本文化をもっと世界に広げていきたいと思いました。それと同時に英会話の重要性も感じる旅になりました。



A.黒はアボリジニの肌の色、黄色は太陽、赤はアボリジニが昔流した血の色を表しています。

中学生レポート④ 藤前干潟を知ろう!

私たちが暮らす名古屋の街にも、藤前干潟という貴重な自然があることを知りました。そこには解決すべき課題があるようです。

1. 藤前干潟とは?

名古屋港に流入する庄内川・新川・日光川の河口部に広がる約300ヘクタールの干潟です。たくさんの生きものたちが暮らす、自然の宝庫です。平成14年にラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)に登録されました。

私たちが生まれる前、藤前干潟がごみの埋立地にされてしまうかもしれないという、危機がありました。しかし、名古屋市民は議論を重ねた末に、藤前干潟を保全し、ごみの分別や資源化に取り組むこととしました。市民一丸となって、大幅にごみを減らすことで、藤前干潟は守られたのです。

2. 藤前干潟の現状

藤前干潟は今、ある問題を抱えています。それは「ごみ問題」。心ない人による不法投棄や、川を流れてきたと思われる物など、ごみが多く自然が汚されてしまっています。また、マイクロプラスチック(※)という新たな環境問題も注目されはじめています。

(※)マイクロプラスチックとは、大きさ5mm以下の(又はより微細な)プラスチックのこと。海に漂う目に見えないごみとして、生態系への影響が懸念されています。

藤前干潟について学べる施設

■環境省藤前活動センター

TEL:052-309-7260

交通:三重交通バス(サンビーチ日光川行き)
「南陽町藤前」で下車、徒歩15分

■環境省稲永ビジターセンター

TEL:052-389-5821

交通:あおなみ線「野跡駅」で下車、徒歩10分
市バス「野跡駅」で下車、徒歩10分

■名古屋市野鳥観察館

TEL:052-381-0160

交通:稲永ビジターセンターと同じ



藤前干潟で暮らす生きものたち



ヤマトオサガニ/撮影者:松本美朝



トビハゼ/撮影者:達知恵吾



チュウシャクシギ/撮影者:高須茂美



オナガカモ/撮影者:吉田英史



カモ/撮影者:高須洋子



学習会と成果の発表

帰国後も学び合いを進めた中学生たち。
旅の成果を多くの人に知ってもらうため、
さまざまな場で学んだことを発表します。

学んだことを多くの人に知ってもらうために ～事後学習会～

日本への帰国後、中学生たちは派遣事業を振り返りさら
なる学び合いを進めるため7回に渡る事後学習会を行
いました。3つの班に分



かれ、それぞれ何を学ん
だのか、何を伝えたいの
かをまとめました。

事前学習会も開催

交流をより実り多いものとするため、
ジロングへ出発する前に事前学習会を開催。
藤前干潟の自然を体感したほか、ジロング
の人たちに自分のことや名古屋の文化を
英語で紹介できるよう、準備を進めました。

全国各地の市町村長に 成果を報告

ラムサール条約に登録されている湿地を持つ
市町村が集まる「ラムサール条約登録湿地関係市
町村会議」が平成28年7月7日に開催されました。

この会議に中学生たちも参加。河村たかし
名古屋市長をはじめ大勢の市町村長を前に、
これまで学んできたことを
報告しました。みなさん中学
生たちの話に関心を示し、熱
心に聞き入ってくれました。



報告書の誌面づくりに挑戦

中学生たちはこの報告書の制作にも携わり
ました。編集会議を開催し、どうすれば見やす
くて分かりやすい報告書になるのか、みんな
でレイアウトのアイデアを出し合ったほか、原稿
執筆にも挑戦。中学生たちの思いがたくさん詰
まった、素敵な冊子となりました。

藤前干潟のPRビデオを制作

もっと多くの方に藤前干潟のことを知ってもらうため、先輩
派遣者とともに藤前干潟をPRする映像を制作しました。
企画・構成・出演・演出はすべて自分たちが担当しました。

みんなの声

18人の中学生たちは、ジロングで何を学び、
何を感じ取ったのでしょうか。
それぞれ感想をまとめてもらいました。

ジロングが第二のふるさとに!?

東港中学校
秋元桜

私が一番思い出に残っていることは、現地の小学生との交流です。最初に、小学生の前で準備してきたプレゼン
をしました、私のグループのテーマは日本の食文化。私は鬼まんじゅうの名前の由来や材料について発表しました。
和食や名古屋めしについて、伝えることができてよかったです。

海洋発見センターでは、案内してくれることになった男の子が、大きな魚や生きものが触れる場所にいたヒトデや
ナマコなどについて一生懸命説明してくれました。スワンベイ干潟は、足が沈んでしまい、歩くことも難しかったです。
私は、カニ一匹しか捕まえられませんでした。男の子はたくさん捕まえていたのでびっくり。一緒に生きものを探せて、
楽しかったです。リコーダーで『ふるさと』を演奏した時、現地の方が「こも、もうふるさとだね」と言ってくださいました。
もっと英語ができればよかったと思います。そうすれば、現地の方にもっと日本の文化をうまく伝えることもできまし、
環境についてももっとたくさん会話ができたのではないかと思います。それでも、今回の体験では、たくさんのことを
学びました。参加して本当によかったと思います。

素晴らしい経験を今後の人生に活かしたい

志段味中学校
上石りん

人生初の海外旅行。期待と不安の入り交じった気持ちで迎えた、あの朝からの6日間で、私は大きく成長したような
気がします。

きれいな町並み、ごみの落ちていない干潟、ジロング市役所での交流…。目に映るすべてのものが新鮮で輝いて
いたのを今でも覚えています。もちろん、環境保全についての意識を大きく変えてくれたのも、この旅でした。地球
規模の環境問題にまで視野を広げて考えることができたようになったのです。帰国後は、落ちているごみを拾ったり、
水や電気を節約したりするなど、環境を守るために役立つようなことが自然にできるようになっていて、自分自身も
すごく驚きました。また、共に生活する中で知った仲間の良さや友情、外国人とコミュニケーションすることの難しさ、
派遣者のひとりとして責任を持って行動することの重要性など、この旅で学んだことは、たくさんあります。それら
すべてが、これからの自分の人生に活かされていく大切なことだと思っています。

一生に一度の貴重な6日間だったこの旅。この派遣に携わってくださったすべての方々に感謝しながら、この
素晴らしい経験を無駄にすることなく、今後の人生を自分の力で切り開いて歩んでいこうと思います。

みんなの声

素晴らしい環境づくりの第一歩に向けて

猪高中学校
小野寺優介

いきなりですが質問です。あなたはこれまでにのりがない動物園へ行ったことがありますか？僕たちが行ったセレンディップ保護区にはのりがないため、とても近い距離で動物を見ることができました。また、フィリップ島自然公園では、野生のペンギンが狩りから家に戻ってくる様子を間近で観察することができました。僕は「こんなに素晴らしいところを見ることができてうれしい」と思いつつも「これからもペンギンを守っていくためには、ひとりひとりがごみのポイ捨てをしないことや、3R(リユース・リデュース・リサイクル)を意識して生活することが大切」だと思いました。

僕の派遣中の目標だった「仲間のみんなと協力し合って最高の思い出をつくる」ということはしっかりと達成することができました。そして僕たちの旅を支えてくれた方々に感謝します。

最後に、ジロングに派遣された僕には使命があると思っています。それは、生きものや環境のことなど、ジロングに行って学んだことや感じたことを誰かに伝えるということです。僕の話聞いてくれた人は、自然に対する気持ちやこれからの環境のことをきっと考えてくれると思うからです。それこそが素晴らしい環境づくりへの第一歩ではないでしょうか。

オーストラリアで気付いた2つのこと

名古屋大学教育学部附属中学校
鬼頭直也

私はオーストラリアで、多くのことを学びました。その中でも、特に強く感じた2つのことを紹介したいと思います。

1つ目は、メルボルンが自然と文化を融合した街づくりをしていたところでした。古くからの街並みを大切にしながらも、デザイン性にあふれたビルなど、新しい建物を上手に取り入れていました。また、街の中心部には大きな公園があり、人々がランニングなどをしていたのも印象的。日本でも古い建物を大切に街づくりができればいいなと感じました。

2つ目は、思ったより外国人と話せたことです。僕は英語に苦手意識を持っていましたが、実際にオーストラリアへ行ってみると、身振り手振りで何とかなったり、片言の英語が通じたりしました。確かにスラスラ会話をするにはもっと勉強が必要だと思いましたが、自分でも外国の人とコミュニケーションでできることが分かり、自信を持つことができました。

今回の派遣では、普段日本にいと気付かない、日本のよさに気付くこともできました。また、自分と同じ考えを持つ大切な仲間たちに出会うことができました。このような機会をつくってくださった人たちに感謝したいと思います。



ジロングで学んだことを多くの人に伝えたい

若水中学校
小垣内珠生

「伝える」ことの難しさをみなさんは感じたことがありますか？私はこのオーストラリア研修の様々な場面で感じました。

例えば、スーパーマーケットで買い物をした時、私が欲しいと思った物を英語でお店のの人に伝えるだけでなく、相手からの返事の意味も理解しなければならなかったもので、ちょっと緊張しました。自分の英語の実力を試すよい機会になりました。ジロング市を表敬訪問した時は、英語で日本の文化の素晴らしさを伝えようとチャレンジ。折り紙やけん玉などを使って一緒に楽しみましたが、ゼスチャーや簡単な英語を使うことで、うまくコミュニケーションが取れることを知りました。

今回の研修で体験したことは、私だけの中にとどまらせていては意味がありません。様々な人に「伝える」ことが一番大切だと感じています。だから、今後機会がある度に私が学んだことや感じたことを伝え、もっとオーストラリアのことを知ってもらい、よい所は真似てもらって、日本がよりよくなることを願っています。文化、人々の生活、生物、自然…。私はこの研修で様々なことに触れ、様々なことを学びました。これからは学んだことを、少しでも多くの人に伝えていきたいです。

気さくでノリのいいオーストラリア人

南山中学校女子部
近藤恵里花

「オーストラリアの人々の暮らしぶりを見て、積極的に交流したい!」。オーストラリアの環境への取組みを学び名古屋の環境問題を知るという目的とは別に、密かに私はこんな目標を持っていました。なので、現地のスーパーマーケットでの買い物や、現地の小学生との交流は、本当に貴重でうれしい体験でした。

オーストラリアで驚いたことが2つあります。ひとつはサイズの大きさ。オーストラリアのスーパーは建物自体が大きく、天井は学校の体育館ぐらいの高さがありました。通路幅が広く、カートもビッグサイズ! 女子会用に買ったクッキーは日本の4倍ぐらいの大きさで、私たちだけでは食べきれませんでした。もうひとつ驚いたのは、現地の人々の人柄。スーパーや飛行機の中で出会った人はみなさん、気さくでノリがよく、外国人だからと身構えることなくジョークなどを言ってくれました。人との付き合いに積極的な姿勢を見習いたいと思いました。

今回の派遣では新しい発見がたくさんあり、とても有意義なものとなりました。派遣を企画してくださった方、引率をしてくださった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。機会があったらまた行きたいと思います。

みんなの声

「見る」「聞く」「感じる」ことができた一週間

名古屋経済大学高蔵中学校
梶村拓海

僕のジロング派遣での目標は、オーストラリアの文化や環境をしっかり「見る」「聞く」「感じる」ことでした。

まず「見る」について。オーストラリアは日本と同じ四方を海に囲まれています。島国というよりは大陸でした。体の大きい人が多く、スーパーマーケットの商品もビッグサイズ。道路や公園も広く、ゆったりしていると感じました。次に「感じる」。ジラリング・コアラ野生動物保護区にいるコアラやウォンバットを初めて触りましたが、ゴワゴワしていました。チクチクすると思っていたので驚きです。またスワンベイ干潟の土はぐちゅぐちゅ。想像以上に冷たくてびっくりしました。南極からの風のせいでもとても寒かったです。南の方は暑いというイメージだったので、地球は丸いと感じました。最後の「聞く」が一番大変。言葉は半分くらいしか聞き取れず、残りは想像で「たぶんこんなこと言ってるんだろうなあ」みたいな感じでした。一番印象に残ったのはペンギンの鳴き声。見た目と違って野性味たっぷりでした。

「驚き」と「発見」が波のように押し寄せてきて、僕の脳を刺激した一週間でした。とても楽しく、仲間もできて大変よい経験となりました。

たくさんの貴重な経験で視野が広がった

天白中学校
瀬口洋太

僕はジロング市への派遣事業に参加して、たくさんの経験をしました。1つ目は、海外に行ったこと。僕は小さい時に一度行ったきりで、今回がほぼ初めての経験でした。慣れない英語を使って買い物をするなど、いい経験ができました。

2つ目は、現地の人たちとの交流です。事前学習会では現地の人たちに日本を知ってもらうため、僕たちのグループは日本の食文化をプレゼンしました。その発表を聞いた方たちは「とても分かりやすかった」と言ってくれました。中には、けん玉学校へ通っていたという方もいて「日本と仲がいいのだな」と思いました。今まではあまり外国人と話してみようとは思わなかったけど、これからはものすごく話してみようと思っています。

3つ目は派遣後のことです。事後学習会では、みんなと意見を共有して、「同じだな」と思う意見もあれば、「それは見てなかった」という意見もありました。みんなの意見を聞くことで、自分自身の視野が広がった気がします。

僕はきれいな干潟や自然環境を知ってもらうため、これからもどんどん環境についての活動を続け、ほかの場所での交流活動にもたくさん参加したいと思っています。



ペンギンとモナ・リザは似ています

城山中学校
中島唯衣

「ペンギンとモナ・リザって似ているかも!」。私が今回の派遣で一番感じたことです。フィリップ島自然公園で野生のペンギンたちが夜に巣に戻るために歩くペンギンパレードを見ました。ペンギンの生息地を破壊することがないように、見学場所がきちんと整備されており、写真撮影も禁止でした。レオナルド・ダ・ヴィンチ作の『モナ・リザ』をバリのルーブル美術館で鑑賞する時も、作品を壊さないように少し離れなければならず、写真も撮れません。私がペンギンとモナ・リザが似ていると思った理由はここにあります。

ペンギンの生活を守るためには、彼らのことや生態系について知る必要があります。私が交流したジロングの小学生たちは、地元の干潟にすんでいる生きものやその生態系について様々なことを堂々と話してくれました。モナ・リザを見る時も、モナ・リザに関する知識を持っていたほうが楽しめるでしょう。

モナ・リザは修復したとしても完全に元通りにすることはできません。それは、ペンギンの生態系も同じこと。モナ・リザは“人類の宝”として後世に伝えていくために、大切にされています。私がオーストラリアで見たペンギンたちも“地球の宝”として大切に、そのままの姿を後世に伝えていかなければならないと思いました。

藤前干潟を守るため、私たちにできること

御田中学校
中村梓

私がこの派遣を通じて学んだことが2つあります。1つ目はオーストラリアの人のごみに対する意識の高さ。街や道路には1つもごみがなく、きれいな状態に驚きました。私が住んでいる名古屋には、いつも道路にごみが落ちています。名古屋でもオーストラリアを見習って、市民ひとりひとりがポイ捨てをなくし、ごみの落ちていない街になればいいなと思いました。

2つ目は、藤前干潟の重要性。私はスワンベイ干潟で、たくさんの鳥に出会いました。それらの中には、藤前干潟を中継地として、北の方へ飛んでいく鳥もいるそうです。鳥たちが休む場所を守るために、ごみを埋め立てる予定だったのを取りやめて、藤前干潟を残したことは知っていましたが、現地の鳥たちと出合って、あらためて藤前干潟が鳥たちにとって大切な場所なのだと知りました。

街中と同様、スワンベイ干潟には1つもごみが落ちていません。これは、人々の意識が高いと同時に、自然を大切にしているからではないでしょうか。私もこれから、より一層自然を敬い、大切にしたいと思いました。まず私自身がごみへの意識を高め、知識を深め、行動に移さなければなりません。藤前干潟を残してくれた先人に感謝して、大切な自然を守っていききたいと思います。

みんなの声

藤前干潟を守ったという誇りを大切に

津賀田中学校
中村美深

オーストラリアで心に残ったことは、日本と比べて自然が豊かな上、人々の環境への意識が高いということです。スワンベイ干潟では、地域の小学生に案内をしてもらいましたが、干潟の生態系や環境をよく知り、とても大切にしていることに驚きました。名古屋に藤前干潟があることは知っていても、行ったことのない人のほうが多いのではないのでしょうか。私の周りに、行ったことがある人はほとんどいません。藤前干潟をごみの埋め立て処分場にするという案が出た時、市民の反対で守ったということを誇りに、もっと多くの人に藤前干潟のことを詳しく知ってもらいたいと強く感じました。

ペンギンパレードでは、ペンギンのために照明を暗めにしたり、お客さんのフラッシュ撮影を禁止したりするなど、動物への配慮を感じました。また野生動物保護区が多くあり、動物を大切にしていることも知りました。環境を破壊し、生態系を壊せば、やがて人にも巡ってきます。そうならないためには、ひとりひとりが環境について学び、行動することが重要です。環境について学ぶには、実際に見て感じる事がとても大切だと思います。日本には自然と触れ合える環境が少ないのではないのでしょうか。多くの人に環境に興味を持ってもらえるよう、まずは発信を頑張っていきたいです。

環境問題と向き合うよい機会に

汐路中学校
服部太陽

僕は今回の派遣を通して、環境汚染問題に対する自分の意識の低さを実感させられました。オーストラリアではごみ箱が至るところに設置されていて、街中にほとんどごみが落ちていません。また、スワンベイ干潟にも目立ったごみはなく、藤前干潟との違いに驚きました。派遣に行く前は、「街のきれいさも干潟のきれいさも、日本とオーストラリアとは、そんなに変わらないだろう」と思っていたので、その差を目の当たりにし、かなりショックを受けました。

近年、日本を含め世界中で環境汚染が問題となっていることは誰でも知っていますが、その中のどれくらいの人改善へと行動しているのでしょうか。派遣に参加する前の僕も含め、ほとんどの人が環境汚染の重大さについて分かっていながら、見て見ないフリをしているのです。今回派遣に参加し、まずは環境汚染の問題に少しでも関心を持ち、行動してみることが大切だと実感しました。

今回の派遣で、環境問題にあらためて向き合うよい機会となり、たくさんのことに気付かされ、学ぶことができました。派遣で学んだことを忘れずに、今後も環境問題に関心を持ち続けたいと思います。今回このような機会をつくっていただき、派遣に参加させてもらったことに感謝したいと思います。ありがとうございました。



オーストラリアでの貴重な体験を振り返って

守山中学校
藤井めぐ

私の派遣中の目標は、干潟や環境保全に対する意識など、日本とオーストラリアの違いを五感で感じることで、実際にいろいろな気付きがありました。

特に印象に残ったことが3つあります。まず、スワンベイ干潟にはごみがひとつも落ちていなかったこと。水辺一面はとってもきれいでした。次に、海洋発見センターでペアを組んだ小学1年生の女の子が、干潟の歴史や生きものに興味を持っていたこと。小さいのにとっても感心しました。最後に、セレンディップ保護区で、ワラビーやカンガルーを間近で見たり触ったりできたこと。保護された動物が自然界と同じように暮らすために施設の周りに囲いがあるだけで、そこにいる動物たちが入るおりはありませんでした。

オーストラリアは緑が多く、野生の生きものがすみやすい環境が整っていることをこの6日間で実感しました。また、子どもから大人まで幅広い世代が環境について意識が高いこともよく分かりました。日本もオーストラリアのように自然を守っていく努力をすることを、文化として継承していく必要があると思います。私は今回学んだことを身近な人に伝えていくとともに、日々の生活の中でもっと環境に配慮した行動を積極的に行っていきたいと思います。

干潟に詳しいボーン君との思い出

桜丘中学校
水谷淑乃

私たちはジロングの小学生と交流しました。まず一緒に、海洋発見センターへ。私のペアは小学1年生のボーン君です。彼は元気いっぱい、あちこち走り回るので付いていくのは大変でしたが、ひとつひとつのショーケースの前で、カニやエビなど現地の生きものについて詳しく説明してくれました。英語が聞き取りにくいこともありましたが、身振り手振りで何とか理解することができました。彼が現地の生きものをよく知っていたからできたことだと思います。

次にスワンベイ干潟へ行きました。ボーン君は早速網で生きものを捕まえます。網の中は藻や海草*ばかりで、動物は入っていないようでしたが、彼はその中からカニや小魚を慣れた手つきで取り出してくれました。スワンベイには魚介だけでなく、ギンカモメなど渡り鳥もたくさんいました。干潟は生きものたちにとって大事な場所なんだと気付かされました。

ボーン君だけではなく、現地の子もみんな、干潟の生態系や地形、海流についてとてもよく知っていました。私たちより幼いのにな…。干潟を愛しているからこそ、知っていたのだと思います。藤前干潟を守るためには、私たちが藤前のことを好きになることが大切だと思います。

*アマモなど海域に生える種子植物を「海草」といいます。昆布やワカメは「海藻」です。

みんなの声

長い距離を飛んで来た渡り鳥の姿に感動

山田東中学校
村瀬淳朗

今回の派遣で一番印象に残っていることは、オーストラリアで暮らしている生きものたちが、みんなイキイキとしていたことです。例えば、干潟では黒鳥やカモメがのんびりと泳いでいました。また、道（まわりは砂漠っぽい）ではワラビーが普通に歩いていました。日本ではありえない光景にびっくり！ その様子は今でも目に焼き付いています。

中部国際空港を出発してオーストラリアに到着するまで丸1日。飛行機に乗っているだけでも、疲れてしまいました。でも、僕たちが住む名古屋にある藤前干潟にいる鳥たちは、直線距離で約6800kmという気の遠くなるような距離を自分の力で飛んでくると感動します。

実際にオーストラリアに行ってみて、その自然の素晴らしさと現地の人々が自然を大切にしている姿を見て、僕たちも見習わなければならないと思いました。藤前干潟もオーストラリアのように、生きものたちの集まる自然豊かな場所であってほしいです。オーストラリアは本当にとてもいいところでした。これからは、もっと現地の人との交流を深めていき、お互いに環境意識を高めていけるといいなと思いました。

大切な仲間たちと共に成長したい

宝神中学校
山田希

私にとってこの事業は一生忘れられない大切なものとなりました。オーストラリアに実際に行ったからこそ体験したり、気付いたり、感じたりすることがたくさんできました。その中からより印象に残っている2つのことを紹介します。

1つ目は街全体に自然、動物、人間、アート、新しい建造物、古い建造物などがあり、お互いを壊すことなくそれぞれが主張していてうまく調和できていたことです。また、街中には様々な人種の方がいて、共に尊重し合って生活しているように感じられました。2つ目は環境へ配慮し、様々な工夫がされていたことです。オーストラリアにはたくさんの動物が生き、たくさんの自然が残されています。人間が環境をしっかり整備し、ひとりひとりが環境に対する意識を高く持っているからだと思います。名古屋でも環境への意識が高い人を増やすために、環境問題のことやその改善策など、身近にできることを伝え続けたいと思いました。

この事業では、もうひとつ大切なことがありました。それは素敵な仲間と出会えたことです。自分の意見を持ち、堂々と発言する仲間の姿を見て、何度も勇気づけられました。私と同じように自然に役立ちたいという仲間たちと共に成長していきたいと思っています。



干潟のあり方をテーマに学びを深める

丸の内中学校
山中瑠莉

今回の事業を通して、私はオーストラリアと日本の干潟のあり方をテーマに学びました。スワンベイ干潟は、藤前干潟と比べて圧倒的にごみの量が少ないことにまず驚かされました。クイーンズクリフ小学校の児童で、私のバディとなったボー君は何度もMFDC（海洋発見センター）へ訪れていたそうです。そのせいか、生きものたちの名前をとてよく知っていました。彼はまだ小学校の低学年だということにびっくり。干潟の生きものとよく触れ合っていることにも感心しました。

なぜ干潟があるのか、ラムサール条約とは何か——そう聞かれた時、すぐに答えられる人は、私の周りに何人くらいいるでしょうか？きつと、ほとんどいないのではないかと思います。今回の派遣事業で、干潟は様々な生きものが暮らす大切な場所であること、ラムサール条約は水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約であることを知りました。学んだことを、より多くの人に知ってもらうため、様々な発表の場を利用し、ひとりでも多くの人に干潟の大切さとその役割を伝えていきたいと思っています。次回派遣される人たちが集まった時、たくさんの意見が持てるよう、今後もしっかり学んでいきたいです。

現地の小学生との交流が一番の思い出

吉根中学校
山本明向

オーストラリアで過ごした6日間は、とても短く感じました。それだけ素晴らしい経験ができたということです。その中でとても心に残ったことは、現地の小学生との交流。自分たちより年下の子が、干潟や干潟の生きものについてたくさんを知っていることに驚かされました。ペアになった小学生と海洋発見センターを回りましたが、一生懸命説明してくれたことが何よりうれしかったです。

さらにスワンベイ干潟に入った時に驚いたことは、干潟にとても慣れ親しんでいたことです。干潟の地面はとてもドロドロとしていたため、僕は足が取られ抜けなくなってしまいました。その時、助けてくれたのは小学生たち。僕はボー君に「足を高く上げて走るとよい」とアドバイスをもらいました。スワンベイで生きもの探しをしました。海草が多いため、探し出すのが難しかったのですが、小学生たちはすぐに見つけ出せるのでびっくり。名古屋の子も彼らのように干潟に慣れ親しんでほしいと思いました。

今回の旅では、オーストラリアの文化にたくさん触れることができましたが、僕の英語力はまだまだだと思い知らされました。もっと勉強をして、再度チャレンジしてみます。環境を守る次の世代は僕たち。これからも環境を守る運動をしていきたいと思っています。